

■ カレントトピックス要旨(2004年4月～5月)

「カレントトピックス」は時々話題を簡潔に取りまとめた記事で、JOGMEC 金属資源情報センターが随時発行しています。記事はインターネット上(http://www.jogmec.go.jp/mric_web/)でご覧いただけるほか、ファックスによる配信も行っておりますので、金属資源情報センターまでお問い合わせください。

在欧大手鉱山会社の 2003 年の業績と探鉱動向
2004年4月1日 No.04-09
<ロンドン事務所 霜鳥 洋>

英国の経済紙 Financial Times はロンドン株式市場に上場されている主要 100 社の平均株価を FTSE100 として示しているが、それには大手鉱山会社が 4 社含まれる。そのうち会計年度末が 12 月の 3 社(Anglo American 社、Rio Tinto 社、Xstrata 社)が 2003 年の業績を、会計年度末が 6 月の BHP-Billiton 社が 2003 年 7～12 月期業績をこの程発表した。各社発表による在欧大手鉱山会社の 2003 年の業績と探鉱動向を報告する。

ロシア鉱業の現状と外国資本
2004年4月9日 No.04-10
<ロンドン事務所 霜鳥 洋>

ロシアが豊富な天然資源を有することは衆目の一致するところである。石油・天然ガスはロシアの輸出額の半分以上を占めており、銅、ニッケル、白金族等の鉱物資源を含めると実に 4 分の 3 に達する。その一方でロシアへの投資はリスクが高いとされ、鉱物資源分野での外国資本の直接投資は限られている。今般、ロンドンで AMA(鉱業アナリスト協会)主催によるロシア投資セミナーが開催され、鉱業の現状と課題が議論された。AMA 講演内容と公表資料に基づき、ロシア鉱業の現状と外国資本の動向について報告する。

Mineral Exploration Roundup 2004 in Vancouver
2004年4月9日 No.04-11
<バンクーバー事務所 中塚正紀>

平成 16 年 1 月 26 日から 29 日、「Mineral Exploration Roundup 2004 in Vancouver」が開催された。ラウンドアップは、BC 州及びユーコン準州鉱業協会(BC & Yukon Chamber of Mines)が主催するもので、26 か国 3,900 人が参加。金、ニッケルや銅など金属価格が大きく上昇する中、資源開発部門に再び活気がよみがえったことを反映し、近年にない大盛況となった。

プレゼンテーションは、B.C.州、アラスカ、Yukon、Northwest、Nunavut など各地域で 2003 年に行われた探鉱結果の発表やバンクーバーを拠点とするジュニア企業等の海外活動等に関するものが中心。今回は、今後の探鉱開発に係る戦略を発表した Barrick Gold 社 Alex Davidson 副社長のプレゼンテーション(「Convergence and Sustainability in Gold Industry」)及び Sudbury 地区で Inco 社が閉山したニッケル鉱山の再開発を紹介した FNX Mining 社 Catharine Farrow のプレゼンテーション(「FNX and McCreedy West Mine Case Study: The Dynamic Link Between Old and New」)を報告する。以下にその要旨を示す。

米国のマンガン合金鉄不足深刻化で関係者の思惑が交錯

2004年4月12日 No.04-12
<デンバー事務所 目次英哉>

米国では製鋼用マンガン合金鉄の品不足が深刻化し、価格の高騰が続いている。これは鉄鋼生産の回復で需要が急速に伸びている一方、国内唯一のマンガン合金鉄生産者であるオハイオ州のEramet Marietta社が装置故障や電力不足のためシリコマンガンの減産を強いられ、またフェロマンガンの主要供給源であった仏・Eramet社が昨年工場を閉鎖、中国は電力不足で生産が低迷し、他国もドル安のため米国への輸出インセンティブを失って、米国への供給が低迷しているためである。1月後半からシリコマンガンの値上りし始め、これを避けるための需要転換が進んだフェロマンガンの2月以降急速に品不足となった。最近の価格はシリコマンガンの2月のピークからやや下げて $\phi 80/lb$ 前後、フェロマンガンは一本調子の上げでUS\$2,000/tに迫る勢いで、いずれも正月前後の相場の3倍近くになっている。

カザフスタン新投資法の制定と税制改正の鉱業投資への影響

2004年4月16日 No.04-13
<アルマティ事務所 酒田 剛>

1991年末、旧ソ連邦の崩壊によって誕生した中央アジアのカザフスタン共和国。CIS地域でロシア連邦に次ぎ豊富な天然資源を有する同国は、独立後の調整期(民営化進行期)から回復期を経て、好調な石油生産を背景に安定した経済成長を続けている。

CIS地域は、ソ連崩壊後に未開発の探鉱地域として注目され、欧米の非鉄メジャーやジュニアによる積極的な活動が見られたが、鉱業法(地

下資源利用法)・課税制度などの不透明さや法治主義の不十分さがリスク要因とされ、ブームは続かなかった。

本稿では、カザフスタンで昨年1月に発効した新投資法と、本年1月に行われた税制改正の特徴を紹介し、同国の鉱業分野における投資環境への影響をコメントする。

PDAC 2004 International Convention 報告

2004年4月23日 No.04-14
<バンクーバー事務所 中塚正紀>

本年で72回目を迎えるPDAC(Prospectors and Developers Association of Canada)国際大会がトロントにおいて3月7日から10日の日程で開催された。昨年以来の金属価格の急上昇を反映し、参加者も増加。出展者および発表者など、85か国約12,000人が参加した。

会議では、中国やインドの個別セッション及び豪州、メキシコ、ニュージーランド、南アフリカやアルゼンチンなどの各国レポートも含めたTechnical Session、投資家を対象としたInvestors Forum等、活発な情報交換が行われ、本報告では、今大会における各セッションから資源ビジネスの今後の方向性について報告する。

銅の鉱山生産動向 主要生産者の2003年生産実績と増産計画

2004年4月27日 No.04-15
<ロンドン事務所 霜鳥 洋>

価格は上昇を続け3月にUS\$3,000の大打に乘せ、4月にはUS\$3,100を超えた。US\$3,000を超えたのは1995年以来である。タイトな需給を反映した価格の上昇を受け、業界第2位のPhelps Dodge社(米)は2004年1月に増産計画を発表した。その後も主要生産者の増産計画の発表が続いた。本稿では、主要銅生産社の2003

年の鉱山生産実績と増産計画、さらに増産計画と需給・価格との関係について報告する。

2003年中国の非鉄金属対外貿易、活況かつ大幅輸入超過

2004年5月14日 No.04-16

<北京事務所 納 篤>

中国経済は順調な成長を続け、2003年のGDP成長率は9.1%を記録した。それに伴い各種非鉄金属の需要量は急増中であり、2003年の非鉄金属の対外貿易は、輸出入の額、量ともに前年より大幅に増加している。以下では、中国海関統計資料を基礎とし、銅、アルミ、鉛、亜鉛、ニッケル、錫の輸出入の現状と変化を報告する。

世界銀行と鉱業の見直し 産業界・政府とNGOで分かれる(EIR)評価

2004年5月17日 No.04-17

<ロンドン事務所 霜島 洋>

鉱業に対する欧米市民の視線は厳しい。エネルギーや金属が日常生活に必要であることは理解しながらも、一般市民が鉱業から連想するイメージは、森林が伐採され地肌が露出した採掘場、製錬所の煙突からモクモクと出る煙、シアンや重金属を含んだ排水の河川への流出、といったマイナスのものが多い。このため、鉱山開発に原住民や地元民が反対している場合、原住民らに同情が集まり、鉱山会社は悪者扱いされがちである。

その現われのひとつが、世界銀行グループ(世銀)が行った見直しである。石油、ガス、鉱物資源産業(以下「採取産業(Extractive Industry)」という)における世界銀行の役割を外部有識者によって見直したもので、2001年に始まり、2004年1月に報告書が世銀総裁に提出された。報告書の採取産業への評価と提言は欧

米市民の視線に近いもので、採取産業のもたらす悪影響が強調され、開発よりも環境と人権を重視することを世銀に提言するものであった。特に、石油・石炭プロジェクトへの融資の停止と、住民の事前通知合意をプロジェクト採択の条件とする旨の提言が関係者間の議論を呼んでおり、世銀は提言への対応をまだ決定していない。

もっとも、世銀の活動が採取産業に占める割合は低く、世銀が採取産業への融資を停止したとしても、直接的な影響はさほど大きくないとされる。しかし世銀の方針は「世界標準」となり得、世銀の方針に準拠する銀行や、企業倫理を重視する企業が世銀に追随する可能性が高く、産業として社会的に否定されるに等しい、と業界は危惧している。本稿では、見直しの経緯と提言の概要、そして提言をめぐる議論について報告する。

国際鉛亜鉛研究会定期会合(2004年春)

2004年5月24日 No.04-18

<ロンドン事務所 嘉村 潤>

2004年4月26~27日、国際鉛亜鉛研究会の定期会合(第7回経済環境委員会、第31回産業アドバイザリーパネル、第98回常任委員会)が例年通り英国ロンドンにおいて開催され、メンバー国等から約30人の鉛・亜鉛の政府・民間関係者が参加した。

今回の特徴としては、例年の鉛亜鉛需給予測、鉛亜鉛産業に影響を与える環境規制等のレビューに加えて、2003年のローマ会議に引き続き国際金属研究会の合理化問題について活発な議論がなされた点があげられる。

銅の鉱山生産動向 第1四半期生産実績と需給
予測

2004年5月25日 No.04-19

<ロンドン事務所 嘉村 潤・霜鳥 洋>

昨年後半から上昇を続けていた銅価格が4月に値を下げた。背景には、投機資金のコモデティから為替へのシフトや、近年の銅需要の牽引者であった中国の経済成長の減速への危惧があるとされる。投機筋の動向は別として、国際銅市場の中長期的方向性を決定する実際の需給はどのようなであろうか。本報告では、2004年1~3月期の鉱山生産量を主要生産者の第1四半期報告書等からまとめるとともに、今後の需給に関する国際銅研究会の予測を紹介する。

国際銅研究会総会(2004年春)の概要報告

2004年5月28日 No.04-20

<ロンドン事務所 嘉村 潤>

2004年5月17~19日、国際銅研究会の総会及びその関連委員会が、例年通りポルトガルのリスボンで開催された。同総会は、研究会メンバー国等から約30人の銅関係の政府・民間関係者が参加し、銅の需給の現状と展望、産業の動向、環境問題、研究会の進め方等について、委員会ごとに報告・討論がなされた。今回の特徴としては、例年の銅需給予測、銅産業に影響を与える環境関連規制等のレビューに加えて、国際金属研究会の合理化の過程に銅研究会も参加するかどうかについて活発な議論がなされたことである。